

リサーチ・デザインと一般化：実践から研究へ

野村 康 (名古屋大学)

本講演では、実践活動を研究につなげていくための考え方・アプローチについて、方法論の観点から議論する。方法論とは、認識論的立場の違いに即して、手法やリサーチ・デザインの活用について理論的指針を与えるものであり、今回はリサーチ・デザインに焦点を当てる。

リサーチ・デザインとは、研究の問いに対する答えを導き出すために、(複数の)手法を方向付けて、得られる知見を一般化する道筋を示し、研究を論理的に形作るものである。主なリサーチ・デザインには、事例研究や実験、横断的研究、縦断的研究があり、それぞれが研究の質を判断する基準である内的妥当性や外的妥当性(=一般化できる度合い)を担保するための独自のロジックを持っている。いわば、実践で得られる知を一般化し、研究へと転化していくためには、リサーチ・デザインのロジックを学ぶことが必要となる。

本講演ではまず、認識論の意義や主な立場を解説し、認識論の違いがインタビューや調査票調査等の手法をどのように規定するかについてお話する。その後、上記の各リサーチ・デザインのポイントを説明しつつ、妥当性概念、特に外的妥当性(一般化)に関する考え方をひも解くことで、(音楽療法研究を含む)様々な分野において、実践に携わる人々が研究に取り組む際に抱えがちな懸念や誤解を軽減することを目的としている。例えば、扱う事例が少数であったり、用いるデータが質的であったりする場合に、どのように知見を一般化していくのか等、実践者がしばしば直面するような状況を想定しつつ議論を進めたい。

■プロフィール

名古屋大学大学院環境学研究科教授。2009年から現所属。専門は政治学。英国ウォーリック大学大学院博士課程修了(PhD)。環境政治や環境教育、リサーチの方法論などを中心に研究活動を行っている。本発表に関連する著作としては、次のようなものがある。

野村康(2017)『社会科学の考え方—認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会